



TITLE:

北宋名人の姻戚関係：晏殊と歐陽脩  
をめぐる人人

AUTHOR(S):

清水, 茂

---

CITATION:

清水, 茂. 北宋名人の姻戚関係：晏殊と歐陽脩をめぐる人人. 東洋史研究  
1961, 20(3): 291-301

ISSUE DATE:

1961-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148223>

RIGHT:

## 北宋名人の姻戚關係

——晏殊と歐陽脩をめぐる人人——

清水茂

### 一

わたしが、王安石（一〇二一～一〇八六）と曾鞏（一〇一九～一〇八二）の散文について、解説を書いたとき、王安石と曾鞏とのあいだに姻戚關係があるらしいことに気がつき、大變興味ぶかく感じた。<sup>(1)</sup> 曾氏と王氏とのつながりは、もうすこし精密にしらべて見たいと思っているが、そのまま、うちすてているので、いづれあらためてのことにしたい。

けれども、ここでひとことだけいっておきたいことがある。それは、王安石と曾鞏との姻戚關係は同時に、王安石と曾鞏の弟曾布（一〇三五～一一〇七）との姻戚關係を意味するものであり、王安石が「新法が行われてから、紛紛

として議論があつたが、呂惠卿と曾布とだけは、終始かわらなかつた。あとのものは、出たりはいつたりだ。」（*琬琰集引宋實錄曾文肅公布傳*<sup>(2)</sup>）といったその結合のなかに、姻戚のつながりという要素がまったくなかつたとはいへまいということである。こんなことから、北宋時代のいわゆる名臣連中のあいだに複雑な姻戚のつながりがあることが氣になり出した。

その第一は、晏殊（九九一～一〇五五）である。<sup>(3)</sup> 詞の作者であるとともに、仁宗皇帝の慶曆年間、樞密使でかつ同中書門下平章事となり、政治の權力をにぎつたかれは、女系のむこに、有力な官僚を次ぎ次ぎと持った。すなわち、南宋の王明清の「揮麈前錄」卷二に、

「晏元獻夫人王氏は、國初の勳臣超の女、樞密使德用の

妹なり。元獻の壻は、富鄭公なり。鄭公の壻は、馮文簡、文簡の孫壻は、蔡彥清、朱聖予、聖予の女は滕子濟に適き、俱に執政と爲る。元獻に古硯一あり。奇甚だし。王氏の舊物なり。諸女相授けて、傳壻硯と號す。今滕氏に藏す。朱の孫女、洪景嚴に適き、近ごろ又二府に登る、亦盛事なり。又古犀帶一あり。亦元獻の舊物。今亦滕氏に藏す。明清嘗つて子濟の子珙の處に於いてこれを見たり。」  
 といっている。<sup>(4)</sup>ひとつこれをたどって見よう。

まず晏元獻すなわち晏殊の夫人であるが、それは三人あって、さいしょが、工部侍郎にまでなった李虛己のむすめ、二番めが、屯田員外郎であつた孟虛舟のむすめ。三番めが、この王氏である。<sup>(5)</sup>父の王超は、國初の勳臣ではあるが、太宗皇帝の近衛兵出身の軍人であり、兄の王德用（九八七〜一〇六五）は、仁宗朝に樞密使となり、また同中書門下平章事にもなった人であるが、これも軍人上がりで、簽書樞密院事になったとき、「武人で無學ですから、大任に當たるほどのものではございません。」とことわつたといふほどで、家がらは、きつとよくなかつたであらう。それが大官になって、その妹を有望な若手官僚の後妻にした

ことは、<sup>(6)</sup>女系による勢力の維持が考えられていなかったであらうか。

晏殊自身の家がらもよくない。その父の晏固は、撫州の主力節級、つまり一人前の官でない、小役人であつた。<sup>(7)</sup>それを引き立てたのは、さいしょの妻の父である李虛己であつて、かれを楊億（九七四〜一〇二〇）に推薦した上、むすめのいいなづけとしたといわれる。<sup>(8)</sup>これを信ずるなら、晏殊のそもその人生のはじめから、妻の力によって官途につくことになったともいえるのである。

晏殊のむすめむこは、富鄭公すなわち富弼（一〇〇四〜一〇八三）である。<sup>(9)</sup>富弼は、いうまでもなく、對遼外交に名をせ、仁宗朝に宰相となつた人である。<sup>(10)</sup>かれも、家がらはよくなかつたらしい。晏殊にくらべるとすこしはましで、「曾大父は内黄の令、諱は處謙。大父は商州馬歩使、諱は令荀、考は尚書都官員外郎、諱は言。」<sup>(11)</sup>と、蘇軾の「富鄭公神道碑」（東坡集卷三七）にあり、中級の官僚のように見える。けれども、北宋の邵伯溫の「邵氏聞見錄」巻八によれば、「富韓公（すなわち富弼）の父、貧甚だしく、呂文穆公（呂蒙正）の門下に客たり。」とあるから、大官

僚の幕客をしていた貧乏士族であった。この晏殊も王徳用と同じく、むこえらびについて、氣をくばっていたらしく、范仲淹にむこを推薦するようにたのんだところ、范が富弼の名をあげた、という。<sup>(68)</sup>

富弼の婿の馮文簡というのは、馮京（一〇二一—一〇九四）のことである。蘇軾の「富鄭公神道碑」によれば、

「女四人、長は保寧軍節度使北京留守馮京に適き、卒す。

又其の次ぎを以て室を繼ぎ、安化郡夫人に封ぜらる。」とあるから、長女が結婚後早逝し、次女がその繼室となったことがわかる。馮京も、神宗朝の樞密副使でかつ參知政事であった人である。「琬琰集刪存」に宋の實錄から轉載した「馮文簡公京傳」<sup>(69)</sup>によれば、その父祖について、何も記さない。それは、おそらく父祖が卑賤であったことを意味するであろう。もし父祖に有名人がおれば、同じく實錄から採った「呂正獻公公著傳」<sup>(70)</sup>のように、記録するのがふつうであろう。馮京の父祖については、ただ宋の江少虞の「皇朝類苑」卷四五に、その父は、馮式といって、左侍禁であったということがわかるだけである。この馮京については、試験をうけたあとで、張堯佐から、外戚の権力で、

むりにむこにされかけたが、それをこわったというはなしがある。<sup>(71)</sup>むこえらびに、みんな一心であったことがわかる。

以上、王超、晏殊、富弼、馮京の四代にわたり、女婿というかたちで朝廷の高い地位が、世世うけつがれ、そのむこたちが、いずれも微賤な出であるらしいことは、注意すべきことのように思われる。

さて、つぎは、馮京の孫むすめのむこになった蔡彥清のことであるが、これは、どうも蔡渭のことらしい。蔡渭の傳記は、宋史卷四七一に見えるが、かれは、姦臣傳のはじめに載せられている蔡確の子であり、のちに名を懋とあらため、これも姦臣傳中の人物蔡京の引き立てで、同知樞密院事になった。宋史には、その字が見えないが、馮京の婿だとあるから、この彥清は、すなわち渭のことであろう。

ただし、かれが馮京のむすめ婿というのとまごむすめの婿というのと、兩説あるのは、王明清か、宋史かどちらかがあやまったのであろう。

つぎの朱聖予というのは、錢大昕のいうように、<sup>(72)</sup>朱諤（一〇六八—一一〇七）のことで、宋史卷三五二に、その

傳が見える。蔡京と親しく、徽宗朝、尚書右丞となった。

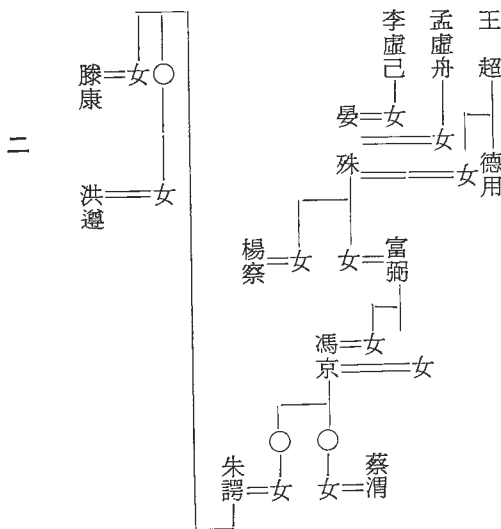
朱諤が尚書右丞となったのは、大觀元年（一一〇七）、蔡懋すなわち蔡洵が、知樞密院事になったのは、宣和六年（一一二四）のことで、朱諤の方が、蔡洵よりも先輩のように見えるから、王明清のいうようにひとしく孫婿である方が、正しいかもしれない。

朱諤のむすめの嫁した滕子濟は、滕康（一〇八四～一一三二）のこと、宋史卷三七五に傳がある。南宋の高宗朝、權同知三省樞密院事となった。ただし、汪藻の「滕子濟墓誌銘」（浮溪集卷二六、四部叢刊本、すなわち武英殿聚珍版本）によれば、「元室常氏、贈右諫議大夫安民の女」とあって、朱氏ではない。疑いを存する。

朱の孫女が嫁した洪景嚴は、洪遵（一一二〇～一一七四）のこと、洪适、洪邁とともに、洪氏の三兄弟の仲弟で、宋史卷三七三に傳があり、孝宗朝、同知樞密院事となった。

當面の問題としては、馮京までがいずれも、微賤の家から出て高官となり、それが、むすめを同じような境遇のものに與えていることである。馮京以下は、なお考證が必要だし、北宋初年とは、すこし事情がかわって來ている可能

性もあるので、ただ、かれらが、いかなる人物であるか指摘するにとどめたい。さて、この女系によって有力な官僚の地位をたもって行く現象のもつ意義を考えるまえに、便宜上、今述べたのを系圖として書いておく。



このように女系によって、官僚としての地位をたもって行くことは、唐代以前にはすくないようである。六朝以前はもちろん、唐代でも、なお男系の世家が強かったよう

あり、名家というものが、本人のいかんを問わず、とうとばれたようである。したがって、妻もその父がだれであるかということより、どこの一門であるかが問題になった。

唐代の名人の夫人は、清河の張氏、清河・博陵の崔氏、滎陽の鄭氏、范陽の盧氏のようないわゆる名門出身者のわりあい、宋代の名人の夫人よりも多いように感ぜられる。

というようなわけで小説にしても、張鷟の「游仙窟」は南陽の張氏と清河の崔氏の戀愛であり、取り持ち役に太原の王氏が出ねばならず、元稹の「鶯鶯傳」も、張生と、鄭氏を母に持つ崔鶯鶯との戀愛であつた。このような名門尊重の風は、斜陽の名門にとって、むすめをくいものにできる機會ともなつた。

唐會要卷八三嫁娶の條に、貞觀十六年六月の詔敕を引いて、次ぎのようについて。

「氏族の盛は、實に冠冕に繋がり、婚姻の道は、仁義より先なるはなし。有魏御を失し、齊氏（とこ）云に亡びてより、市朝既に遷り、風俗陵替し、燕趙の右姓は、多く衣冠の緒を失し、齊韓の舊俗は、或るいは德義の風に乖く。名は州閭に著わると雖も、身は未だ貧賤を免れず、自ずから膏粱の

胄と號すとも、匹敵の儀を敦くせず、問名は惟だ貨を竊むに在り、結褵は必ず富室に歸す。乃ち新官の輩、豐財の家有つて、その祖宗を慕い、競つて婚媾を結び、多く貨賄を納むること、販鬻の如き有り、或るいはその家門を貶して、屈辱を姻婭に受け、或るいはその舊族を矜り、無禮を舅姑に行なう。積習俗を成し、今に迄るまで未だ已まず。既に人倫を紊し、實に名教を虧く。朕夙夜兢惕、政道を憂勤し、往代の蠹害、咸く已に懲革するも、惟だ此の敝風、未だ盡くは變ずる能わず、今より已後、明きらかに告示を加え、嫁娶の序は、各おの典禮に合するを識らしめよ。朕が意を知らば、それ今年六月より賣婚を禁ぜよ。」

没落した名門が、名門なるが故の地位をたもち、新興成金たちが、それと姻戚となることによって、自分たちの社會的地位を高めようとしていたことがよく示されている。

ところが、唐末五代の戰亂は、そのような名門を根こそぎくつがえした。食うや食わずのはげしい戰爭のあけくれは、實力を必要第一としたし、官吏になることは、馮道のとき柔軟な性格を持つものでなければ、生命の危險にいつてもおびやかされねばならないものであつた。そこで中

央で官吏になるのは危険だし、といって、地方でくらししていくにも、戦争にその財産をおびやかされているとすれば、名家であるだけでその生活を維持することは到底できなかったであろう。北宋初の官僚の父祖には、戦乱のために仕えなかったものが多い。五代の戦乱は、官僚としての名門というものをなくしてしまったといつてよい。かくて、北宋初期の官僚たちは、親たちのおかげでなくて、自分たちの實力でのしあがって來た。そこには、世家としての家風がないから、むすこが、その傳統をうけつぐ可能性がすくなく、そのために、自分の官僚としての地位をうけつがせるには、むすめによいむこを選ぶ方が、好都合であったのであらう。

こうした實力第一の思想とともに、名門の地位をあやうくしたのは、戦乱によって、系譜が失しなわれ、名門のよりどころである「血統書」がなくなったため、人間は大よりも毛なみのよしあしの判断がむずかしくなったことであらう。特に中原の大戦乱は、名門の地方行きをやむなくさせたし、たしかに蜀とか南唐などの方が、平和であった。宋初の大官に、蜀や南唐の出身者が多いことも注意すべきで

あらう。この地方へ、名士が出て行つたとき、本ものばかりでなく、にせものもまじっていたことが想像される。黄巢の亂で死んだはずの皮日休が、江南へ流浪して、吳越の錢氏によつたという傳説ができて、問題を提起したりする。新五代史に義兒傳というものができるほど、姓氏はいかげんになった五代の亂世なのだから、名門などというもののは、信用できないし、したがって價值を持たなくなつたと思われる。

かくて、名門であることが價值を持たず、實力が尊ばれた結果、唐代では斜陽の名門が富みを得るための手段としたむすめを、宋代では、一代貴族たちが、自分の貴い地位を、何らかのかっこうで自分の血縁にのこすためのものとしたようである。

むすめにすぐれたむこをえらぶことによって、自分の血のつながりのものに、高い地位を維持させようとする高官たちの努力は、一方、低い身分の出身者にとつても、歓迎されたことであらう。高官のむこぎみになることは、種種の點で利便が與えられるであらうからである。

晏殊から富弼、馮京以下へ流れる女系の線は、このよう

に引かれた。おそらく、これは、王明清が特に注意するほどのもっとも典型的なかたちで女系による官僚の地位の維持があらわれたものであろう。

### 三

次に、歐陽脩（一〇〇七～一〇七二）について見てみよう。かれの出身もあまりよくない。父の歐陽觀は、泰州の判官でなくなった。その上の世代は、南唐に仕えた下級官僚であった。かれは、わかいとき、はなはだ貧乏であったというはなじも傳わっている。

かれは、三度妻をめとった。最初は、翰林學士胥偁のむすめである。胥偁は、歐陽脩を引き立てた人であり、この點、晏殊に對する李虛己と同じような立ち場にある。次ぎに右諫議大夫楊大雅のむすめ、さいごに薛奎のむすめをもらった。薛奎は、仁宗皇帝の天聖年間から明道年間にかけて、參知政事になった人である。かれの妻は次第に高官のむすめとなっていることは注意してよい。

けれども、この薛奎も一代貴族であった。歐陽脩の「薛公墓誌銘」には「曾王父、大王父、王父、三世皆顯なら

ず。」といい、また薛奎の弟薛塾のために歐陽脩が書いた「內殿崇班薛君墓誌銘」（歐陽文忠公文集卷六一）にも「薛は絳の大族、簡肅（薛奎）より興る。」とある。だから、歐陽脩が薛奎のむすめを妻としたのは、晏殊が王徳用の妹をもらったのと同じように、一代貴族が有望なむこをえらんだかたちである。薛奎は、歐陽脩のほかに、王拱辰（一〇一二～一〇八五）をむことした。しかも、王拱辰はまず姉をめとり、次ぎにその死後、妹をめとった。「薛公墓誌銘」では、「……次ぎは太原の王拱辰に適き、早く亡す。次ぎは廬陵の歐陽脩に適き、次ぎは又王氏に適く。」といっている。王拱辰は、天聖八年（一〇三〇）、歐陽脩と同じ年に、進士に首席で合格し、三司使などになった人であるが、人物はあまりよくなかったらしい。薛奎の一族との姻戚關係は濃く、そのむすこたち、王正甫、王端甫は、いずれも薛奎の兄薛睦の孫むすめをもらっている。（歐陽脩「國子博士薛君墓誌銘」歐陽文忠公文集卷三四）。王拱辰は、議すべき點があったとはいえ、經濟官僚として活躍したひとりであり、有望な人物と薛奎が考えてむことしたにちがいない。



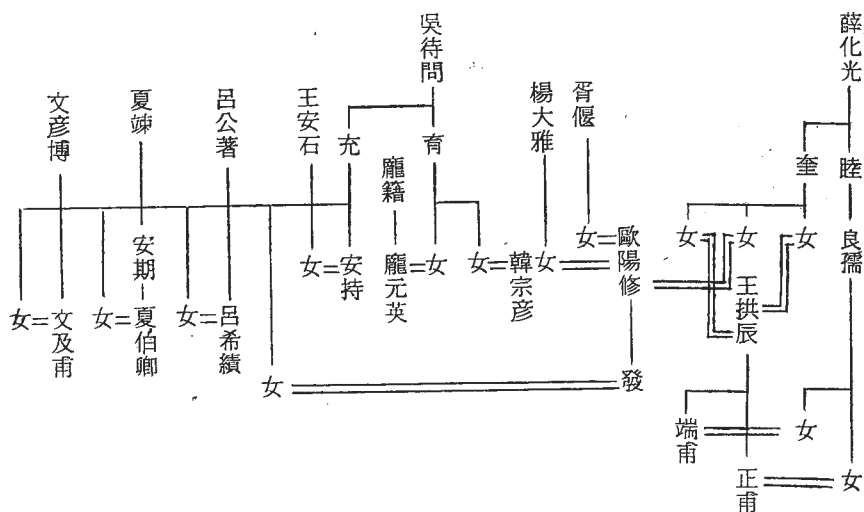
歐陽脩の子の歐陽發（一〇四〇～一〇八五）は、吳充のむすめを妻とした。（張耒「歐陽伯和墓誌銘」張右史文集〔四部叢刊本〕卷五九）これは、甚だ興味深いことである。というのは、吳充の子女と、當時の大官僚との結びつきが甚だ密であるからである。吳充（一〇二一～一〇八〇）は、神宗皇帝のとき、中書門下同平章事に任じた人で、王安石と同じ年令で且つ同じ年に進士に合格した。おそらくそんな關係からか、吳充の子吳安持は、王安石の長女を妻とした。また、吳充のむすめたちは、李清臣の書いた吳充の墓誌銘によれば、「女四、長は殿中丞歐陽發に適き、次ぎは尚書都官員外郎呂希績に適き、次ぎは光祿寺丞夏伯卿に適き、次ぎは承事郎祕閣校理文及甫に（適く）。」とある。歐陽發の妻の次ぎの妹が嫁した呂希績は、哲宗朝に宰相となった呂公著（一〇一八～一〇八九）の子である。その次ぎの夏伯卿は、仁宗朝、樞密使、同中書門下平章事となった夏竦（九八四～一〇五〇）の孫である。いちばん下のむすめのむと文及甫は、仁宗朝及び哲宗朝に、宰相となった文彦博（一〇〇六～一〇九七）の子である。このように見てくると、吳充のむすこやむすめたちは、名臣の二世・

三世たちを姻戚の關係でむすびつけているといつてよい。

吳充の家がらは、父の吳待問が尚書禮部侍郎になってから、目立つようになつた家である。先祖は、建州浦城（今の福建省浦城縣）の人で、祖父の諒は儒學に明きらかで郷里で教授したというから、いなか儒者であつた。けれども、兄の吳育（一〇〇四～一〇五八）が仁宗皇帝の慶曆年間、樞密副使から參知政事になって、父の獲得した官僚の地位をいっそう鞏固にし、つづいて吳充が出、新興官僚の世家となつたように思われる。吳育のむすめのうち二人は、韓琦の一族らしいが、だれの子かまだ調べていない韓彦と、仁宗朝の宰相であつた龐籍（九八八～一〇六三）の子の龐元英とに嫁している。ここに、新興の官僚家族が、他の官僚家族と姻戚をむすんで、新しい門閥を作つて行くすがたが見られるように思う。

いま、これらの關係を次頁に系圖にしておこう。

わたしは、北宋初期の新興の士大夫階級が、どのように姻戚に結びつき、新門閥を形成して行つたか、それを甚だ興味の多いことと思つている。新門閥として完成されたものに呂氏（呂蒙正、呂夷簡、呂公弼など）、韓氏（韓琦、



韓忠彦など、もう一つの韓氏（韓億、韓絳、韓絳、韓維など）、その他があり、それらが實に複雑な姻戚關係で結びつきあって、ひとつの統治集團を形成して行ったもののよう  
 うに思うのであるが、それらの結びつきについては、まだ整理がゆきとどいていない。ここでは、ひとまず、その家族が世家とならず、むすめむこの形で、統治階級の地位をたもていった晏殊の女系、新興官僚たちの急速な結びつきが見られる歐陽脩と吳充の一門についてだけ述べてみた。これは、いわば、標題の「北宋名人の姻戚關係」の發端をなすものであることを諒とせられたい。

（一九六一、一一、二）

#### 註

- ① 清水茂「唐宋八家文」（中）（東京 朝日新聞社 一九六〇）二六六頁以下。
- ② 「三朝名臣言行錄」（四部叢刊本）卷六には「王丞相（安石）嘗云。自議新法。始終言可行者。曾布也。言不可行者。司馬光也。餘皆前叛後附。或出或入。」とあり、呂惠卿の名をあげない。なお、この條、出典を記さない。
- ③ 歐陽脩に「晏公神道碑銘」（歐陽文忠公文集卷二二）がある。宋史本傳は卷三一一。
- ④ 錢大昕「十駕齋養新餘錄」卷下「晏元獻夫人」の條および夏

承燾「唐宋詞人年譜」(上海 一九五五)二六三頁參照。

⑤ 歐陽脩「神道碑銘」

宋史卷二七八本傳。

⑥ 宋史卷二七八本傳。歐陽脩「武恭王公神道碑銘」(歐陽文忠公文集卷二三)。王安石「王公行狀」(臨川先生文集卷九〇)。

⑦ 同上。

⑧

⑨ 夏承燾「唐宋詞人年譜」二六三頁によれば、王超は、晏殊が二二歳の大中祥符五年(一〇一二)になくなっているから、晏殊が三度めの妻として王氏を迎えたときは、おそらく王超はなくなり、王徳用が家をついでいたであろう。

⑩

朱熹「五朝名臣言行錄」卷六之三に「溫公日錄」を引く。歐陽修「晏公神道碑銘」では、父祖につき、「高祖墉、唐咸通中、擧進士、……其後三世不顯。」とそのあと三世の名まえをしるだけである。夏承燾「唐宋詞人年譜」一九七頁參照。なお、清水「唐宋八家文」(中)五頁にもふれておいた。

⑪

前掲「五朝名臣言行錄」引「溫公日錄」。夏承燾「唐宋詞人年譜」二〇二頁以下參照。このむこえらびの傳説に、あやまりがあり、あてにならぬことが同書に見える。

⑫

歐陽脩「晏公神道碑銘」では、「女六人、長適戸部侍郎同中書門下平章事富弼、次適禮部侍郎三司使楊察、其四尙幼。」とある。次女の婿の楊察も高官で、宋史卷二九五に傳がある。そこで更に歐陽脩は、神道碑に「至擇其女之所從、又得二人者如此。」という。富弼の妻は、神道碑では長女となっているが、夏承燾「唐宋詞人年譜」二二四頁には、晏殊の「答中丞兄家書」に「二娘子」とあるのに注意して、富弼に

嫁したのは、次女であるというが、この「二娘子」は必ずしも晏殊の次女であることを意味しないであろう。排行を示す数字は、ほんとうの兄弟にかぎらず、同族の同輩を通して数えるのがつねであるからである。

⑬

富弼の傳は、宋史卷三一一。

⑭

「琬琰集刪存」(哈佛燕京學社引得特刊之十二 北京 一九三八)卷二、四四頁bに富弼の「富秦公言墓誌銘」がある。そこには「我先君奮寒苦」と記す。

⑮

夏承燾「唐宋詞人年譜」二二三頁以下にこの事情はくわしい。

⑯

馮京の傳は、宋史卷三一七。

⑰

「琬琰集刪存」卷三、三二頁b。

⑱

前掲書卷三、一一頁a。

⑲

宋史および「馮文簡公京傳」。後者によれば、「(馮)京及第時、張堯佐倚外戚、欲妻以女、使吏卒擁以入其家。頃之中人以酒殺至、且示以衾具甚厚。京固辭曰『老母已議王氏』終弗就。」とある。この王氏と富氏の二女の關係は、どうなるのかわからない。王氏の死んだあとに、富弼のふたりのむすめが、つぎつぎとついでなのであろうか。そうすれば、後妻であって、むこがかなりの地位を得てから、とついでことが想像される。

⑳

「十駕齋養新餘錄」卷下「晏元獻夫人」。

㉑

宋史卷二一二宰輔表三。

㉒

陳寅恪「元白詩箋證稿」(上海 一九五八)の「讀鶯鶯傳」の一〇八頁以下を見よ。なお、陳寅恪「記唐代之李武韋楊婚姻

- 集團」(歴史研究一九五四年第一期)に南北朝隋及唐初社會の門族との婚姻に對する觀念が略述してある。(二三頁以下) 蕭滌非「校點『皮子文藪』說明——兼論有關皮日休諸問題」(文史哲 一九五八年第一期)四頁以下。
- 23 歐陽脩「歐陽氏譜圖」(歐陽文忠公文集卷七一)。
- 24 清水「唐宋八家文」(中)一四頁。
- 25 歐陽脩にその「胥夫人墓誌銘」(歐陽文忠公文集卷六二)がある。
- 26 歐陽脩にその「楊夫人墓誌銘」(前掲書卷六二)およびその父楊大雅の「諫議大夫楊公墓誌銘」(同上卷六一)がある。
- 27 蘇轍にその「歐陽文忠公夫人薛氏墓誌銘」(樂城集卷二五)があり、歐陽脩はその父薛奎の「資政殿學士戸部侍郎簡肅薛公墓誌銘」(歐陽文忠公文集卷二六)を書いている。
- 28 邵伯溫「邵氏聞見錄」卷八に、歐陽脩が王拱辰に戯むれて、「舊女婿爲新女婿、大姨夫作小姨夫」という詩句を作ったというはなしを載せる。
- 29 「琬琰集刪存」卷三、五一頁aに實錄から「王懿恪公拱辰傳」を轉載する。又、宋史卷三一八。
- 30 清の蔡上翔「王荊公年譜考略」(上海 一九五九)三九頁。
- 31 「琬琰集刪存」卷二、二三頁a「吳正憲公充墓誌銘」。なお宋史の吳充の本傳は、卷三一二。
- 32 「琬琰集刪存」卷三、一頁a以下「呂正獻公公著傳」。
- 33 王珪「夏文莊公神道碑」(武英殿聚珍版全書「華陽集」卷三五)。
- 34 宋史卷三一三文彥博傳。又、「琬琰集刪存」卷三、一四頁b
- 以下「文忠烈公彥博傳」。
- 35 前掲「吳正憲公充墓誌銘」。
- 36 歐陽脩「正肅吳公墓誌銘」(歐陽文忠公文集卷三二)。
- 37 韓琦のこともたちは、忠彥、端彥、良彥、純彥、粹彥、嘉彥、同母兄の韓琦のこともは、正彥であつて、宗彥の名は見えないが、同じ排行に屬するひとりであることはまちがいない。
- 38 宋史卷三一 龐籍傳。司馬光「太子太保龐公墓誌銘」(溫國文正司馬公集「四部叢刊本」卷七六)。王珪「龐莊敏公神道碑」(華陽集卷三五)。
- 39

**Intermarriages between Eminent Families  
in the Northern Sung Dynasty**

*Shigeru Shimizu*

Under the T'ang dynasty the "eminent men" who were successful in climbing the social ladders by their own merits tried to make matrimonial ties with the traditional aristocracy, while some of the declining noble families desired the same from economic reasons. Then came the troublous age of the Five Dynasties which destroyed the old aristocracy. Most Sung eminent men who came from the lower classes attempted to keep their families' social and political status by choosing able young men for their daughters in marriage. Such instances are not difficult to find: An Shu, Premier in the T'ang era, married his daughter to Fu Pi who became a premier and played an important role in negotiations with Liao; Ou-yang Hsiu's family had matrimonial relations with Hsüeh K'uei and Wu Ch'ing; Wu Ch'ung's family had close ties by marriage with the families of such eminent people as Ou-yang Hsiu, Wang An-shin, Lü Kung-chu, Hsia Sung and Wên Yen-po.

**Notes on the History of China Merchants'  
Steam Navigation Company**

*Hironao Kitamura*

In January, 1877, China Merchants' Steam Navigation Company purchased at the amount of 2,200,000 Shanghai Tls. Shanghai Steam Navigation Company which was an affiliated company of Russel & Company, resulting in a sudden expansion of the former's business, but this event initiated a series of public controversy on the corruption therein during 1880-81 with Wang Hsien-ch'ien playing an active part. Memorials to the throne were drafted by Liu K'un-i and Li Hung-chang, relying on the reports of investigation by Liu Jui-fên